山頭火句碑と防府市のまちづくり
―『山頭火新聞』を手がかりとして―

堀江新子

1．はじめに

種田山頭火は防府市が生んだ自由律俳句の俳人である。その生涯は人間とは何か、人間はどのように生きて、どのように死ぬかを追い求めた一生であった。山頭火の生活そのもの、生き様、そして作って残した俳句は、現代の私達にも共感を与え、自分自身に重ね合わせて、自分を見つめなおす機会を与えてくれている。

山頭火の句碑は、全国に600基以上の句碑があり、防府市内にも80基以上ある。「山頭火ふるさと会」が『句碑めぐりMAP』を発行しており、34基を取り上げている。「山頭火ふるさと会」は前身の「山頭火研究会」の創立昭和54年（1979）以来35年にわたり山頭火の顕彰に努めて来た。また平成5年に創刊された『山頭火新聞』は、防府市や山頭火に関わる全国都市における活動の貴重な記録となっており現在41号を発行している。「山頭火ふるさと会」は生誕地である防府市や山頭火が歩いて作句したゆかりの地で全国大会を毎年開催している。その会場では山頭火自身の著作、山頭火に関する研究書、山頭火を素材とした優れた写真集や書・絵画、版画等も多く紹介され、作品を通じて活発な交流がなされている。また、俳句大会も開催されている。しかしながら、これらの愛好会においては所属している会員によって熱心に開催されて受け継がれているが、一般の人が自由に参加できる環境が整っていないようである。

本稿では、防府市内の山頭火句碑を建立しているもの、句碑を設置している関係者に聞き取り調査を実施し、『山頭火新聞』に掲載されている記事を手がかりに、「山頭火ふるさと会」が句碑建立にどのように関わり、市内の句碑関係者とどのように関わってきたかを明らかにし、『山頭火新聞』に取り上げられたイベント、活動報告等によって、「山頭火ふるさと会」が防府市民と全国の会員とどのように関わり、防府市の文化創造にどのような影響を与えてきたかを検討していきたい。郷里では必ずしも愛されなかった山頭火の価値を改めて確認し、まちづくりへの可能性についても考えていきたい。

2．「山頭火ふるさと会」と『山頭火新聞』

2．1　「山頭火ふるさと会」の概要

「山頭火ふるさと会」の前身である「山頭火研究会」は昭和54年（1979）12月3日に創立され翌昭和55年に正式に発足した。研究会の設立メンバーは富永鳩山（書道家）、窪田耕二（防府日報記者）、田中四郎（市役所職員）であった。翌年又田竹栖（自由律俳句俳人）と橋本隆道（護国寺住職）が加わった。護国寺には山頭火の墓[1]があり、資料展示室がある。また自由律俳句大会が開始された。

「山頭火ふるさと会」設立総会が平成5年（1993）11月17日に防府市のシャンピアホテルで開催された。初代会長は富永鳩山（書道家）であり、名称を「山頭火ふるさと会」とし、設立の目的は山頭火を広く顕彰し、文化の高揚を計ることであった。活動としては、山頭火研究、広報、山頭火にちなむ各種イベントの企画運営、文化資料館建設促進であった。平成6年度の活動として、「旅の会」、「酒の会」、「定例句会」、「芸術展」が予定された。来賓として「防府の文化を高める会」会長である吉井惇一防府市長が祝辞を述べた。

山頭火顕彰に功労のあった大西力（医師、ふるさと会の前身である山頭火研究会会員）、林信彦、橋本隆道、窪田耕二、右本アヤ子（自由律俳人）、種田美奈子（種田山頭火の孫）、故田中四郎に感謝状が贈られた。副会長に佐藤国憲（防府商工会議所専務理事）、橋本隆道、窪田耕二、清水八重子（自由律俳人）、田中睦子（自由律俳人、田中四郎夫人）、理事に下尾周男（画家）、高橋ちちり（俳人、高橋飄々子夫人）、中村武文、種田勇、山下重子（写真家）、種田信子、菅沼良行（関東）、弓削久美子（関西）、河野健二（四国）、森忠彦（九州、毎日新聞）、佐々木健（中国）、宮内林童（山口県内）、監査に安達智、原田勝吉、事務局長に福島正則、特別顧問に種田美奈子（山頭火孫）、磯部セツ子（山頭火妹）、顧問に吉井惇一（防府市長）、重田好一、清水玲持、大村浩（商工会議所会頭）、江本正弘（会社社長）、村田寿太郎（医師）、橋口照男（会社社長）、田中常治、吉次ナツ子（婦人会会長）、鈴木健一郎（防府天満宮宮司）、城島浩（医師）、大西力（医師）、宮本研道（小郡町長）、友沢安子、近木圭之介（詩人、山頭火と親交があった）、西野理郎（現代俳句俳人）、佐伯寅杖、和田健（詩人、山頭火と親交があった）、村上護（山頭火研究家）が就任した。全国に会員を募集して創立時に327名が入会した。句碑は設立当時において防府市内に51基、全国に230基建立されていた。

2．2 「山頭火ふるさと会」の活動

「山頭火ふるさと会全国フォーラム」第1回目を防府市で開催し、その後は毎年山頭火ゆかりの都市を廻り、昨年第22回目を開催した。5年に1回は防府市で開催している。大会日程は全国俳句大会表賞、基調講演、シンポジューム、パネルディスカッション、創作劇、合唱等公演、懇親会等が主な内容である。

開催年	場所	主催、共催、協賛	参加	テーマ・内容
第1回 1992年	防府市デザインプラザ	山頭火研究会 防府商工会議所	300人	参加地紹介 山頭火レポート
第2回 1993年	熊本市鶴屋デパート	山頭火を愛する会	300人	熊本・山頭火の周辺
第3回 1994年	小郡町ふれあいセンター	小郡町 商工会	350人	其中庵見学、山頭火にあえるみかん園の句碑めぐり

第4回 1995年	宮崎公立大学	宮崎大会実行委員会	500人	日向路の山頭火
第5回 1996年	防府市公会堂	山頭火ふるさと会	1500人	寅さんと山頭火 市内句碑めぐり
第6回 1997年	長崎県 島原市文化会館	島原ほろほろ会 島原文化連盟	400人	
第7回 1998年	福岡県糸田町 文化福祉会館	山頭火ふるさと会	350人	こころの友・木村緑平 山頭火と緑平
第8回 1999年	愛知県美浜町 総合体育舘	美浜町、三河知多山頭火の会	500人	美浜の山頭火、真贋・山頭火 山頭火めぐりバスツアー
第9回 2000年	愛媛県松山市 市民会館	まつやま山頭火の会	500人	松山の山頭火を知る 四季の山頭火（女声合唱）
第10回 2001年	防府市公会堂	防府商工会議所 やまぐち文学回廊 構想推進協議会	1500人	ふるさと防府 2001・山口県の文学者たち
第11回 2002年	兵庫県高砂市 福祉保健センター	北野木鶏大会実行委員会	400人	自然への愛・人間への愛
第12回 2003年	長崎県平戸市 文化センター	平戸市 山頭火ふるさと会	400人	私の山頭火
第13回 2004年	大分県湯布院町 湯平小学校	湯平町 山頭火ふるさと会	350人	大分と山頭火
第14回 2005年	熊本県八代市 日奈久温泉	八代市 山頭火ふるさと会	400人	山頭火と現代
第15回 2006年	防府市公会堂	国民文化祭文芸祭 山口県、防府市	3866人	癒しの俳人種田山頭火 山頭火カルタ大会
第16回 2007年	東京都荒川区 日暮里本業寺	命と愛のメッセージ実行委員会 荒川区地域振興公社		うしろ姿や、山頭火 山頭火の歩いた時代 山頭火と東京 山頭火の歩いた東京
第17回 2008年	山口県山口市 山口教育会館	山頭火ふるさと会		山頭火・童謡詩人の誕生 種田山頭火と中原中也
第18回 2009年	愛媛県松山市 子規記念博物館	松山市、山頭一草庵祭実行委員会	600人	松山ゆかりの文人、子規、 漱石、遼太郎、そして山頭火 種田山頭火の詩魂・時空を超えた 人気の理由は

第19回 2010年	下関市川棚温泉交流センター川棚の杜	山頭火ふるさと会		望郷の地平を行く山頭火・漂泊の日記に映る山口県
第20回 2011年	兵庫県高砂市播州山頭火句碑の園	山頭火ふるさと会	100人	一人一人が自分山頭火を持とう
第21回 2012年	防府市地域交流センター	山頭火ふるさと会	500人	鴉啼いて私も一人・山頭火物語
第22回 2013年	宮崎県五ヶ瀬町五ヶ瀬町Gドーム	五ヶ瀬町	400人	分け入っても分け入っても青い山

表1　『山頭火新聞』第1号～41号から筆者作成

第1回は平成4年（1992）10月30日防府市で、村上護（山頭火研究・作家）が「山頭火の旅と俳句」を基調講演し、「参加地紹介と山頭火レポート」では、研究家、劇作家の村上護、「鉄鉢の会」高山図南雄、町をあげて山頭火顕彰に取り組んでいる長谷川芳広福岡県糸田町長、熊本市から「山頭火を愛する会」榎本茂副会長、大分市から山頭火研究グループ藤原嘉久、松山市から山頭火の最後を看取った高橋一洵氏長男高橋正治、宮本研道小郡町長、下関市と山口市から詩人で山頭火と交流のあった近木圭之介、和田健、防府市から「山頭火ふるさと会」富永鳩山会長が発表した。今後も全国フォーラムを継続することが決まった。

第2回は平成5年（1993）11月28日熊本市鶴屋デパートで、星永文夫（俳人）「熊本・山頭火の周辺」講演、前山光則（山頭火研究）による生前の山頭火を知る3人のインタビュー、榎本茂監督・エイトマンクラブ制作「何処へ行く山頭火」映写会等が開催された。

第3回は平成6年（1994）11月26日山口県小郡町ふれあいセンターで開催された。小郡町は山頭火の其中庵、文化資料館を見学し、防府市西浦にある「山頭火に会えるみかん園」内にある句碑めぐりを開催した。

第4回は平成7年（1995）11月25日宮崎公立大学講堂で、山口保明が「日向路の山頭火」を講演した。

第5回は平成8年（1996）11月30日、12月1日防府市公会堂で、山頭火ブームのきっかけを作った永六輔が「寅さんと山頭火」を講演し、市内句碑めぐりを開催した。

第6回は平成9年（1997）10月26日長崎県島原市文化会館で開催した。

第7回　平成10年（1998）10月24日福岡県糸田町文化福祉会館で開催された。糸田町は山頭火を温かく物心両面から支援した木村緑平（俳人・医師）が住んでいた所である。原達郎（山頭火研究）が「山頭火と緑平」を講演した。

第8回　平成11年（1999）10月16日愛知県美浜町総合体育舘で、山頭火ゆかりの地を

廻るバスツアーが行われた。

第9回　平成12年（2000）10月9日愛媛県松山市民会館で、松山女声合唱団が「四季の山頭火」を発表した。

第10回　平成13年（2001）9月8日防府市公会堂で、那須正幹（作家）が「山頭火の生きた時代」を講演し、梯比呂子（山頭火研究）が司会をして近木圭乃介、和田健の2人と「山頭火と山口県の文学者たち」をパネルトークした。俳優で画家としても活躍している片岡鶴太郎が「山頭火と私」を講演した。バスツアーを行い、生誕地、護国寺資料館、湯田温泉、小郡町其中庵を廻った。

第11回　平成14年（2002）4月20日兵庫県高砂市福祉保健センターで開催された。「播州・山頭火句碑の園」には6基の句碑がある。

第12回　平成15年（2003）10月26日長崎県平戸市文化センターで、金子兜太（現代俳句協会名誉会長）が講演した。

第13回　平成16年（2004）11月3日湯布院町湯平小学校で開催した。

第14回　平成17年（2005）9月24日熊本県八代市日奈句温泉で、「山頭火と現代」と題して村上護と松原新一が討論会を行った。

第15回　平成18年（2006）11月4、5日防府市公会堂で第21回国民文化祭文芸祭として開催され、防府演劇研究会による山頭火劇「分け入れば山頭火」が上演された。佐野浅夫（俳優）が「山頭火と私」を講演した。地域交流センターアスピラートでは、山頭火シンポジュームが開催され、大塚幹朗、山下文雄による映画「ビバ山頭火・熱きメッセージ」が上映された。「山頭火いろはかるた大会」に小学生から成人までが参加した。

第16回　平成19年（2007）10月5、6、7日東京都荒川区日暮里本行寺とホテルラングウッド内サニーホールで、山頭火俳句大会、劇団遊行舎による「うしろ姿や、山頭火」が上演され、金子兜太（現代俳句協会名誉会長）が「山頭火の歩いた時代」を基調講演し、シンポジューム「山頭火の歩いた東京」が開催された。主催は「命と愛のメッセージ」実行委員会、山頭火フォーラム実行委員会、荒川区地域振興公社であった。

第17回　平成20年10月4、5日山口市山口教育会館で、北川透（詩人）が「山頭火・童謡詩人の誕生」基調講演し、シンポジューム「種田山頭火と中原中也」があった。

第18回　平成21年10月10、11、12日　松山市で「山頭火一草庵祭」と題して子規記念博物館で、ドナルド・キーンが「松山ゆかりの文人たち、子規、漱石、遼太郎、そして山頭火」を講演し、パネルディスカッション「種田山頭火の詩魂・時空を超えた人気の理由は」を開催した。

第19回　平成22年10月24日山口県下関市川棚温泉交流センター川棚の杜で、劇団海峡座小森稔による日記朗読、古川薫が「望郷の地平をゆく山頭火・漂泊の日記に映る山口県」を講演し、シンポジューム「山頭火川棚温泉」が開催された。

第20回　平成23年10月1、2日兵庫県高砂市播州山頭火句碑の園（山頭火句碑35基）公園広場で、大会記念句碑除幕式が行われた。会場を鹿島殿に移して、坂本福治（画家）

が「一人一人が自分の山頭火を持とう」を講演した。

第21回　平成24年12月1、2日防府市地域交流センターで、中村敦夫、佐々木梅治による朗読劇「鴉啼いて私も一人・山頭火物語」が上演された。映像「放浪と句作の足跡をたどる」鑑賞会が行われた。

第22回　平成25年10月19、20日宮崎県五ヶ瀬町五ヶ瀬町Gドームで、書道パフォーマンス、三浦豪太郎が講演を行った。森松平・杉の子経営者、森忠彦・毎日子ども新聞編集長、曽我部房子の3者による対談が行われ、「分け入っても分け入っても青い山」が発句された五ヶ瀬町が今大会のテーマであった。

「山頭火全国フォーラム」は各都市ともに全市をあげて取り組んでおり、わが町こそ山頭火にふさわしいという熱気を感じる。多彩なイベントが企画され出演者、参加者双方向の関わりが活気に溢れている。特に防府市は各都市を廻った後に、5年に1回戻ってきて開催するというスパイラルを確立したことから、地元商工会、企業と協働して、まさに全市を挙げての行事となっている。参加者も300人から1,500人と確実に増え続け、そして15回大会では国民文化祭・文芸祭としての共催もあって3日間で3,866人の参加者となっている。このエネルギーを新しい世代にどのように受け継いでいくのかが今後の課題である。

3.『山頭火新聞』にみる防府市の山頭火句碑

3．1『句碑めぐりMAP』みる現地調査した句碑

防府市内には2014年現在80基以上の句碑がある。「山頭火ふるさと会」がキャッチフレーズとして「種田山頭火に出会う、心の旅に出かけませんか？山頭火のふるさと防府」と掲げて、それにふさわしい句碑を34箇所選び『句碑めぐりMAP』を刊行している。本項では現地調査をした生誕地跡の句碑、道路を隔てた前にある水のみ場の句碑と山頭火の墓がある護国寺の句碑について説明する。

3．1．1　生誕地跡の句碑（防府市八王子2—13）

種田山頭火は防府市八王子に明治15年に誕生し、明治39年までの24年間をこの地で過ごしている。大地主であったが現在は何も残されておらず、まさに句碑に刻まれた「生まれた家は　あとかたもない　ほうたる」がそのまま当てはまる状態である。句碑はゴールデンライオンズクラブが1989年8月に建立し整備した。石は市内の仏光堂提供の石を使っている。現在の問題点は、設立当時に俳句の投句箱も設置されたが管理する人が高齢化したことである。生誕地跡句碑の建屋の中に山頭火ノート№.3（平成23年10月19日～）が備えてあり、来た人が自由に書き込むようになっている。日本各地から来ており外国人も見受けられる。(2011. 11.18)　America Loves Santoka　Wood Smith　from Hiroshima 。また「山頭火ふるさと会」全国フォーラムに参加した折に記入された様子が見られる。(2012. 11.30)「日奈久町つくり協議会」「山頭火実行委員会」平田啓、日奈久温泉にはたご「おりや」有り、旅館「不知火ホテル」宮永、日奈久の宿　「山頭火」おみやげの店　小松明治

と記入されている。

3．1．1　山頭火生誕地前　水のみ場句碑（生誕地前防府市八王子2丁目10－15）

句碑建立者は森重クリーニング代表の森重隆治であり、山根石材が担当した。建立者は「山頭火ふるさと会」会員であり、「自治会長」を24年務め、現在は交替している。平成15年（2003）12月3日に建立し、句は「ひょう　ひょうとして　水を飲む」を選んだ。理由は「この地の水は飲み水に適しており、量も豊富であり、家業においても今でも井戸を利用している。水が良いので水にちなんだ句を選んだ。壷の形をした句碑の字は、護国寺にある句碑の山頭火自筆の字を写した。句碑建立経費は7～8万円で、「山頭火ふるさと会」が負担した。生誕地の前なので水のみ場として、生誕地句碑の建屋ができた時に建て、生誕地の句碑と共に世話をしている。当時毎日新聞防府支局長であった森忠彦は次のように言っていた。「地元の人は、『あんな者にはなるなよ』と言っていたが、山頭火の生き方と俳句の評価とは別に考えなくてはならない」と言っていた。建立して山頭火を通じて人を知り、仲間が増えたことが良かったし、困ったことは特別にはない。

写真1　生家跡建屋と句碑
「生まれた家はあとかたもない　ほうたる」

写真2　水のみ場
「ひょうひょうとして　水を飲む」

3．1．3　護国寺境内の句碑

橋本隆道（護国寺住職）は駅前公園に建立されている托鉢姿の山頭火の銅像について「托鉢をするときは、右ききの人は右手に杖、左手に鉢を持つのが普通であるが、この銅像は逆になっている。その理由は、行乞は仏になって歩くのであるから接待を受ける時は、右手に鉢を持ち替えて受け取ったであろう。普段歩く時は右手に杖を持っている。山頭火が禅の修行僧であったことをこの銅像によって示そうとした」と説明があった。次に山頭火の日記文学としての価値については「山頭火文学は、日記が世に出たことによって日記文学として認められてきた。日記文学として残すことによって人間的な側面について読者に共感と感動を与え山頭火を有名にした。そして“焼き捨てて　日記の灰のこれだけか”という句があるが、焼く前の日記と焼いてからの日記は違っていると思う。焼く前は人に見られ

たくない内容も含まれていたであろう。焼いてからの日記については、山頭火は日記が将来世に出ることを予測して書いたと思われる。それは松山に行く前に書かれた母に与えたメモが発見されたことや山頭火の最も近しい支援者であり句友であった緑平に送った手紙によっても検証できる。日記にすることで山頭火の句に解釈を加えたといえる。日記がなかったら山頭火の句はこのように有名にならなかったと思う。日記がないと解釈が難しいからであり、それは芭蕉に倣っていると思う。また山頭火ブームについては大山澄太が山頭火を偶像化し日記を紹介して山頭火のファンをつくった。日記文学にすることによって山頭火の俗性を消したといえる。」と説明があった。また護国寺には山頭火の墓があるので、多くの著名人が訪れる。例えば渥美清も訪問して来たが、口数の少ない人であった。後で分かったことであるが、その当時も病気のせいで苦しかったようである。永六輔に第10回「山頭火ふるさと会全国フォーラム」の講演会への出演をお願いしたが交渉は大変難航した。1年前から依頼したが、日取りが直前まで決まらなかった。また出演料はいらない。投げ銭でいいといわれる。今思うとすなわち間接的な出演拒否であったと思う。ようやく1ヶ月前に決まり、「寅さんと山頭火」と題して講演してもらった。永六輔は、物事の表と裏とをよく考える人であり、そしてそれを面白く表現する人であり、放送作家としての才能なのか、人の印象をつかむのがとても上手い人という印象をもったと話された。

「山頭火ふるさと会」と今後の展望については自分たちの殻の中に山頭火を抱え込み過ぎた。又田、永島、柳の3氏が山頭火研究会をやっておられたが高齢になられたので、自分達はまったく新しい別の会を作った。自分達も若い人たちを育てていないので、若い人たちに新しい会を作りまとめる人がでてきてほしいと思う。センター機能が果たせる拠点となるような、学習したり遊んだりできる行政が関与する強固な記念館がほしい。記念館としての資料がないとよく言われるが資料は借りてくればよいし、松山から防府へ何度も資料の提供を言われているがその都度防府市は断っている。資料はいろいろな人が保有しているし、借りることができるので運営はできると展望を述べられた。

今回の調査では山頭火に何らかの関係があった人が、句碑を立てて山頭火に触れられる場所を提供している。山頭火ふるさと会全国フォーラム等で防府を訪れた人も訪問している。他の観光資源とも連携して、句碑を通して句碑に書かれた意味を考える機会となり、句碑めぐりが観光としても楽しめる工夫が今後の課題である。

3．2　『山頭火新聞』に掲載された句碑

『山頭火新聞』は平成5年11月に「山頭火ふるさと会」が創設したことを記念して創刊され、現在41号まで発行している。主として全国の会員（約350名）に送付し、経費は会費と広告掲載によって賄われている。記事取材、執筆、発行は「防府日報」記者であり社長であった現「山頭火ふるさと会」会長である窪田耕二の労力に負うところが大きいと思われる。本項では『山頭火新聞』が定期的に会員に届けられることによって、一見ばらばらにみえる会員や膨大な数の山頭火句碑を結び付け、ひいては会の運営、継続に貢献して

いる現状と今後の課題を明らかにする。

３．２．１　松田みかん園―山頭火にあえるみかん園

第１号の平成５年（1993）11月27日に松田農園を取り上げており、農園の開園は大正２年９月（1916）年であり98年の歴史がある。創業者は松田憲治、そして息子の松田義夫が受け継ぎ、現在は孫にあたる松田祥治が経営している。松田義夫が山頭火の自筆の短冊を手に入れたことがきっかけで、山頭火に興味をもつようになり、文学も取り入れた観光農園にしようと山頭火句碑の建立を思い立った。入り口の頭上には山頭火の生家である種田家が防府市大道に開業した酒蔵の大きな桶や道具が収納されている。大型のクレーンを使って運び出し、そのうちの２個は現在大道にある山頭火展示場にも展示されている。

写真３　種田家酒蔵の桶、道具類

写真４　入り口にある句碑

山頭火句碑は平成５年（1993）年10月23日に28基が一挙に建立され除幕式が行われた。その後山頭火の日記文など11基が加えられ３９基になった。建立費用は松田農園が負担し、田村石材が工事を請け負い最初の２～３基だけ受け取り後は受け取らなかったそうだ。39基を廻ると山頭火の人となりが分かるように配置した。

最初に除幕された句碑は次の28基である。　（　）内は筆者が説明を加えた。

ふるさとはみかんの花のにおうとき	山頭火自筆
石があって松があってそして蜜柑があって	大山澄太（宗教家、俳人）
みかんやまかがやけり児らがうたふなり	山田魯江（書道家）
蜜柑の花がこぼれるこぼれる井戸のふた	川崎秀苑（書道家）
蜜柑うつくしいいろへしぐれする	西山珠香（書道家）
みかんお手玉にひとりあそんでいる	中島魯淵（書道家）
手から手へ蜜柑を窓にさようなら	山田梓江（書道家）
ゆう空から柚子の実ひとつをもらう	松浦正人（政治家）
ふるさとや少年口笛とあとやさき	富永鳩山（書道家）
まどろめばふるさとの夢の葦の葉ずれ	大山澄太（宗教家、俳人）

山あれば山を観る、雨ふれば雨を聴く　春夏秋冬、
　あしたもよろし　夕べもよろし　　清水義正（書道家）
七夕の天の川よりこぼるる雨か　　大山澄太（宗教家、俳人）
ふるさとの山はかすんでかさなって　　富永鳩山（書道家）
ふるさとのあの山なみの雪のかがやく　　羽仁照華（書道家）
育ててくれた野や山は若葉　　江本正弘（商工会御所会頭）
天われを殺さずして詩を作らしむ我生きて詩を作らむ、
　われみずからのまことなる詩を　　村田萩堂（書道家）
何を求める風の中ゆく　　佐藤信二（政治家）
分け入っても分け入っても青い山　　山頭火自筆
うしろ姿のしぐれてゆくか　　羽田荻径（書道家）
生死の中の雪ふりしきる　　平井　徹（政治家）
鉄鉢の中へも霰　　山頭火自筆
うどんをそなへて母よ私もいただきまする　　村田萩堂（書道家）
うれしいこともかなしいことも草しげる　　山頭火自筆
もりもりもりあがる雲へあゆむ　　和田　健（詩人）
歩かない日はさみしい飲まない日はさみしい
　作らない日はさみしい　　吉井惇一（政治家）
空へ若竹の悩みなし　　渡辺文雄（俳優）
春風の扉をひらけば南無阿弥陀仏　　島田　明（政治家）
はるばるときてくんでくれた水を味あう　　近木圭之介（詩人）

追加された11基の句碑は次の通りである。　（ ）内は筆者が説明を加えた。
晴れきった空はふるさと　　橋本龍太郎（政治家）
このみちや　いくたりゆきし　われはけふゆく
　しずけさは死ぬるばかりの水がながれて　　村田萩堂　（書道家）
ゆうぜんとして生きてゆけるか　しょうしょうとして死ねるか[2)]
　どうじゃどうじゃ　山に聴け水が語るだろう　　村田萩堂（書道家）
他人に頼るなかれ　自分を信ぜよ　せめて晩年だけなりとも人並に生きたい。
　ほんとうの句を作れ、山頭火の句を作れ、人間の真実をぶちまけて人間を詠へ、
　山頭火を詠へ　　村田萩堂（書道家）
うらのこどもはよう泣く子　となりのこどももよう泣く子
　となりが泣けばうらも泣く　泣いて泣かれて明け暮れる　村田萩堂（書道家）
けさは猫の食べのこしを食べた、先夜の犬のことをもあわせて雑文1篇を書こうと思ふ、いくらでも稿料が貰へたら、ワン公にもニャン子にも奢ってやろう、むろん私も飲むよ！　　村田萩堂（書道家））

芸術は誠であり信である、拝む心で生き拝む心で死のう　そこに無量の光明と生命の世界がわたしを待っていてくれであろう　村田萩堂（書道家））

一杯東西なし、一杯古今なし　３杯自他なし
ほろほろとろとろどろどろぼろぼろごろごろ　曽光一恵（舞踏家）

すなほに咲いて白い花なり　橋本隆道（住職）

あなもったいなやお手手のお米こぼれます　宮本研道（政治家）

うれしいこともかなしいことも草しげる　山頭火自筆

雲の如く行き、水の如く歩み、風の如く去る、一切空　高村正彦（政治家）

広大な丘陵地に39基もの句碑がみかん畑の合間に点在している。案内図に従って1番から39番まで廻ると約2kmある。見晴らしの良い丘に出るかと思えば、うっそうとした樹の下をくぐり、落ち葉を踏んで廻る句碑めぐりは運動になる。ただしあまりの広さに草が生い茂り、手入れが行き届かず碑文も読めないところもある。

３．２．２　コーヒーの句

平成6年（1994）5月6日14時から防府市天神1丁目12レストラン「エトワル」前で、山頭火の唯一残されたコーヒーの句「あさせみ（朝蝉）すみ通るコーヒーをひとり」の句碑建立式が行われた。昭和13年7月、当時としては貴重なコーヒーをもらった山頭火が、さわやかな早朝のコーヒーの味を朝蝉のすきとおるような鳴き声に託して作った句である。即興でつくった句で、万年筆でメモ書きし、句友であった河内山光男氏（号は暮羊、当時は小郡農学校の教師で、其中庵から100m足らずの近所に住んでいて親密な交流があった。後にふるさと防府市の富海に帰郷、防府市議会議員を2期8年間つとめ、昭和54年71歳で死去）に手渡した。その頃の日記にはコーヒーについては毎日のように登場するが、この句はなぜか記載されておらず、幻の句となっていた。昭和47年5月に山頭火研究家で詩人の中山哲郎氏が河内山氏をインタビューして、『山頭火ノート』8号（平成2年10月発刊）に当時のエピソードと共に「山頭火とコーヒー」として発表され話題となった。建立者である畑公爾は、日本コーヒー文化協会理事であり、その話を聞きコーヒー文化振興にも役立つと句碑建立を思い立った。句碑は富永鳩山（山頭火ふるさと会会長）が揮毫し、高知県産紅霊石（高さ160cm、幅156cm、厚み43cm）を使用し、防府市内53番目の句碑（全国では約300余基）が誕生した。

その後『山頭火新聞』第3号、平成6年（1994）10月25日発行に、40年間不明だったコーヒーの句の真筆が出てきたという記事が掲載された。島根県益田市の女性から「朝蝉澄とほるコーヒーを一人」という短冊があると連絡がありコピーを送ってもらった。このような発見も『山頭火新聞』が全国の山頭火ファンを繋いでいるからこそできたことであろう。

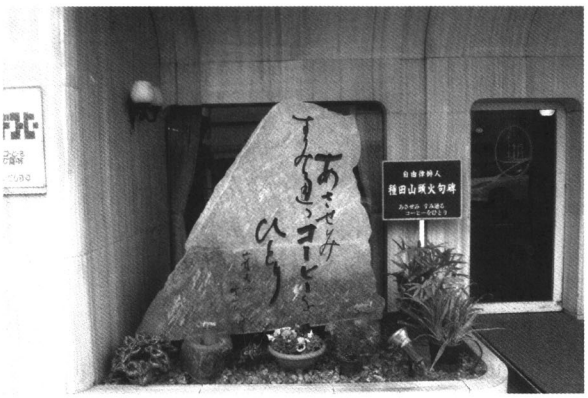

写真５　護国寺門前
「酔うてこほろきと寝ていたよ」

写真６　喫茶エトワル
「あさせみすみ通るコーヒーをひとり」

３．２．３　地元企業の句碑との関わり

平成５年（1993）12月３日、マツダ防府工場正門正面に句碑が建立され、建立式が行われた。マツダ工場内にある「愛情防府運動・市内企業35社で構成」推進の一環として、同工場社員のカンパにより建立された。「何の草ともなしに咲いているふるさと」と刻んである。出口年秀工場長は「山頭火が異郷の地で豊かな自然に恵まれた防府の地への望郷の念を素朴に力強く歌い上げた句であり、いろいろな土地から、この防府の地に集まった人たちが、この地をふるさととして根を張り、花を咲かせようという願いをこめて選句し建立した」と挨拶した。揮毫は護国寺橋本隆道住職であった。江本正弘観光協会会長、富永鳩山山頭火ふるさと会会長、定石征洋真マツダ労働組合副会長、敏弘克己助役らが出席した。

次に協和醗酵防府工場正門前に「一合枡を形どったユニーク英訳付句碑」として紹介された。「月が酒がからだいっぱいよろこび」という句を富永鳩山山頭火ふるさと会会長が揮毫した。この句碑は、防府市制60周年を記念すると共に、愛情防府運動の一環として建立され、台石に一合枡を表現した主碑をのせたユニークなデザインである。酒類の製造もしている協和醗酵にふさわしい句碑となっている。吉井市長、大村商工会議所会頭、愛情防府企業代表の下野マツダ防府工場長、協和醗酵協力会中村代表、従業員代表加来支部長、富永鳩山山頭火ふるさと会会長らが出席した。また山頭火句碑では全国で２つめの珍しい英訳文も刻まれている。英訳は三田尻女子高校長に着任した米国人ジョンソン校長が協力した。

３．２．４　その他の句碑

大道地区に久保汎が平成６年（1994）７月24日地区の地蔵盆の日、山頭火が明治39年から大正５年まで（1906～1916）住んでいた種田酒造場の近くに「日ざかりのお地蔵さんの顔がにこにこ」の句碑を建立した。郷土研究グループ「ふるさと大道を掘り起こす会」（末広元一会長）が、大道市東（いちひがし）の旧自治会館跡に展示場と句碑を完成させた。展示場に旧種田

酒造場の酒樽2基が置かれ、側に酒樽にちなんだ「酒樽洗う夕明かり鵙（もず）けたたまし」の句碑が建立され5月18日落成式が行われ「掘り起こす会」会員、吉井惇一防府市長ら50人が出席した。護国寺橋本隆道住職が揮毫した。また掘り起こす会では、山頭火の大道時代の俳句430句を会誌にまとめている。句碑の石は国道2号線の改良工事で撤去された石橋の石を利用した。その後、大道地区には小俣八幡宮に笑顔句碑、切畑の田中是親宅にも句碑が建立された。

「山頭火にあえるみかん園」がある松田農園は98年の歴史があり、広大な敷地に39基もの句碑が点在し、運動を兼ねて句碑めぐりをするには最適な場所であるが、管理が行き届かないところがある。「山頭火ふるさと会」等がボランティアを呼びかけて、整備を兼ねて句碑ウォーキング等の企画をして貴重な資産を継承していくことが今後の課題である。「山頭火ふるさと会」はイベントの開催と共に『山頭火新聞』に記録を正確に残し、情報を正確に早く届けることを続けてきたことが明らかとなり、会のさまざまな情報を公開し、発信することによって、情報の信頼性を高めており、どんな会においても会を存続させるためには不可欠な要件であることが判明した。

4．おわりに

山頭火句碑を調査することから、句碑の大半は行政が関与することなく個人が私財を投じ、あるいは自主的な市民の集まりである団体の浄財によって建立されていることが明らかになった。従ってこれらの句碑は誇らしげに宣伝し見物者を集めるでもなく、周囲の人々は建立者への敬意を払い意思を尊重し、共有化することはあってもある程度の限度を保って鑑賞されている。従って句碑が爆発的に建立されながらも個人所有の財産と思われており、まちづくりにとっては強力な要因とはなっていないといえる。また『句碑めぐりMAP』は非常にコンパクトで利用しやすくできたツールであるが、「山頭火ふるさと会」が発行し管理しているので市民や観光客が手に取る機会は少ないし利用することも困難であることが分かった。「山頭火ふるさと会」関係者からも「自分たちの殻の中に閉じこもり過ぎた」との反省の言葉が聴かれたように、会の関係者が所有する情報・資料を一般に公開する手段を構築しなければ新しい世代が育たないと思われる。そのためにはようやく「山頭火記念館」（仮称）の建設が始動し始めたところで、新しい世代を含めた取り組みが可能であろう。

『山頭火新聞』を手がかりに、山頭火句碑と防府のまちづくりについて考察を試みたが、「山頭火ふるさと会」が一見ばらばらに存在している山頭火ファンや句碑をまとめる役目を果たしていることが明らかになった。特に『山頭火新聞』を通じて全国の山頭火ファンを結びつけて、情報の共有化に大変役立っていることが判明した。「山頭火ふるさと会全国フォーラム」の開催をみてみると他の会場では300人から600人の参加者であるが、防府市で開催の会は1,000～1,500人の来場者を迎えている。第15回大会では3日間に3,866名の参加者があった。それは国民文化祭との共催ということもあって行政との協働が効を

なしており、また演出をふるさと会が担当していることが、「山頭火ふるさと会」の人脈の深さ、広さを存分に活かしている成果だと思われる。つまり一つの会やグループを存続し、継続するには、正確な記録とその記録の広報が大きな要因となり、会員の能力をフルに活用することが不可欠であることが判明した。『ほうふ日報』の記者であった現「山頭火ふるさと会」会長の窪田耕二氏の防府の山頭火を世に広めるという強固な意志と努力によっても成し遂げられたと思われる。今後ともこの記録と広報活動を新しい世代が継続することが必要である。また全国に広がりをみせた人脈から、防府市民が山頭火に対する評価を「わが郷土の愛する山頭火」としてくれるには、維持してきたこの貴重な財産をどこまで公開し、新しい世代と共有できるかにかかっていると思われる。そこに防府市のまちづくりの可能性があると本稿では強調したい。

[注]

1) 山頭火の墓は防府市本橋の護国寺境内にあり、本堂に併設して山頭火資料展示がある。山頭火の遺骨は市民墓地が改葬される際に、前住職が現在の地に埋葬した。

2) しょうしょう　ではなく　しょうよう　が正解であると松田農園が指摘した。

[参考資料]

『山頭火新聞』1号～41号　平成5年（1993）～平成25年（2013）山頭火ふるさと会発行

山頭火ふるさと会作成『防府の生んだ癒しの自由律俳人種田山頭火　句碑めぐり MAP』山頭火ふるさと会発行

田村悌夫「俳人高橋飄々子の世界」『公立大学法人山口県立大学付属　郷土文学資料館センターだより』第14号 2009年11月20日

林昭夫写真・編集　『山頭火句碑文学碑めぐり・ご案内』松田義夫（松田農園）1993

防府の文化を高める会　山頭火ふるさと会編集・発行『防府の生んだ俳人　山頭火』　昭和48年（1973）初版　平成18年（2006）第6版　編集委員：長嶋宏武、又田竹栖、三浦明、富永鳩山、窪田耕二、橋本隆道、田中四郎、中村美津夫

所属：山口地域社会学会・山頭火ふるさと会

E-Mail アドレス：horiewakako@yahoo.co.jp